（第6回日本土木史研究発表会論文集　1986年6月）

絵地図にみる橋詰広場施設と景観の移り変り

― 江戸から今日まで ―

法政大学非常勤講師　　正会員　伊東　　孝

The Transition of Bridgehead Plaza Facilities and its Landscape by Studying Pictures, Photos and Maps

— From the Edo Period to the Present —

By Takashi itoh

概　　要

ここ一，二年，都市における身近な土木施設として，橋が注目されている。橋のたもとにとられる，ちょっとした空地「橋詰広場」は，都市のオープン・スペース，ポケット・パークとしても注目されている。

本稿は，かつては賑いの場であり，交通・情報センターとして機能していた橋詰広場が，どのように変遷して今日に至ってきたのか，について簡単な素描を試みたものである。

江戸から今日までの時代を，ⅰ）江戸初期，ⅱ）江戸後期，ⅲ）文明開化期，ⅳ）モダニズム期，ⅴ）現代の5期にわけ，それぞれの時代を代表する絵図・写真・地図などを手がかりに橋詰広場施設と景観の変遷を，日本橋を例にして，検討している。

結論として，

ⅰ）時代を経るにしたがって，橋詰広場は自由な空間ではなくなったこと。言いかえれば，管理されたスペースになってきたこと。

ⅱ）多種多様な機能を有し，人の賑いの場であった橋詰広場は，時代の推移と共に，単一的な機能スペースとなり，賑いの場ではなくなってきたこと。

等を指摘している。〔キーワード：時代別，橋詰広場，景観〕

"広場"という言葉は，われわれ都市計画家にとって，ひじょうに魅惑的な言葉だ。広場は，西欧の自由と民主主義を体現している都市施設と考えられるからだ。広場をつくり出すことがかって，都市計画の目的の一つであった，といっても過言ではない。

橋のたもとにとられるちょつとした空地は，橋台敷・橋台地公園・橋台広場など，ニュアンスの相違をみせながら，様々によばれている。橋詰広場ともよばれる。ここではまず，用語「橋詰広場」の変遷について検討をかえる。次に絵地図などを手がかりに，実態としての橋詰広場の様子を時代別にとりあげ，橋詰広場施設の移り変りを考察してみたい。

1.　用語「橋詰広場」の変遷

"橋詰広場"という考え方は，いつ頃から導入されたのであろうか。「江戸名所図会」などには，床見世・露店がたち並び，人の往来のはげしい橋詰広場の様子が描かれている。建物に囲まれ，閉じられたスペースの中で，市民が集う西欧的な広場とは違うが，極めて日本的な広場が形成されていた，と言える。

しかし，自由と民主主義を体現している。"広場"という観念が日本に紹介されるのは，おそらく明治維新前後にかけてであろうから，"橋詰広場"の用語も，これ以後に現われた，と考えられる。

これに対し，「橋詰」は古い感じがする。日本語的な響きがある。したがって「橋詰広場」は，従来からあった日本の言葉に，翻訳語の「広場」とを組みあわせた新しい合成語ではないかと考えられる。

このような仮説で，OED[1]の日本語版ともいえる「国語大辞典」[2]で橋詰広場の用語の変遷を調べてみると，実に意外なことがわかった。

確かに合成語「橋詰広場」の登場は，明治以後であったが，それぞれの言葉「橋詰」と「広場」とは，江戸の頃から存在したのである。「橋詰」はかなり前から使用されている。

(1) 「橋詰」について

① 「橋詰」という言葉が，文献で最初に出てくるのは，「今昔物語」である。11世紀初頭のことだ。しかし当時は「橋詰」ではなく，「橋爪」が用いられている。

② 「橋詰」という今日の表記法になったのは，「東海道中膝栗毛」（19世紀初頭）からであり，その前には，「橋づめ」という表記もみられた。「国語大辞典」には，用例も紹介されている。その中から「橋詰」の様子のわかるものをとりあげてみよう。

＜11日めに京着して，まず三条の橋づめに宿かりて＞（浮世草子「好色盛衰記」）

とある。橋の下で一夜をすごしたのであろうか，それとも文字通り宿をとったのであろうか。

＜橋詰の非人（みだれ）どもが，繻絆の風なんぼとった＞（滑稽本「東海道中膝栗毛」）[3)]

今も昔も橋詰は，不浪者の溜り場であったことがわかる。

(2) 「広場」について

国語大辞典には，用例として，「日葡辞書」・人情本「春色梅児誉美」・二葉亭四迷訳「めぐりあひ」の3例がのっている。二葉亭四迷訳の「めぐりあひ」は明治期なので，用語の登場自体不思議はないとしても，先の2つはいつ頃だろうか。それぞれ調べてみた。

人情本「春色梅児誉美」は為永春水の作で，天保3，4年（1832，33年）に書かれたもの，そして「日葡辞書」は何と慶長8～9年（1603～4年）に出版されているのである。ザビエルがキリスト教を日本へ布教するために作成した辞書なのだ。

この時代に，「広場」という言葉が既に存在していたのである。意味は，「広い場所」「公の場所」「人の大勢いる場所」とある。文例としては，ローマ字で「Firobaye detguqeta fito」（広場へ出つけた人）が紹介されている。意味は「公衆の前とか，大勢の人々の集まりとかに出るのに慣れている人」。

江戸の初期には，今日使われている意味の「広場」という用語が存在していたのだ。驚きであった。

以上，「橋詰」「広場」と別々の文例を紹介したが，合成語としての「橋詰広場」の文例は，見い出すことができなかった。

(3) 法制度にみる「橋詰広場」

今度は，視点をかえて法制度的な文言の中から，探してみよう。というのは，震災復興計画で初めて橋詰広場の大きさが決められているからだ。[4)]

① 明治8年（1875年）の道路橋法案では，車両の衝突をさけるため，橋際になるべく余地を残すことを定めているが，「橋詰広場」という言葉は使用されていない。

② 明治32年（1899年）の東京市参事会議決「道路樹木植付に関する内規」には，“橋詰広場”の用語が登場している。これは表題にあるように，樹木を植える場所として，“橋詰広場”をあげたものだ。[5)]

法制度が一般社会の反映とすれば，合成語「橋詰広場」は，明治維新前後に定着してきた言葉らしい。

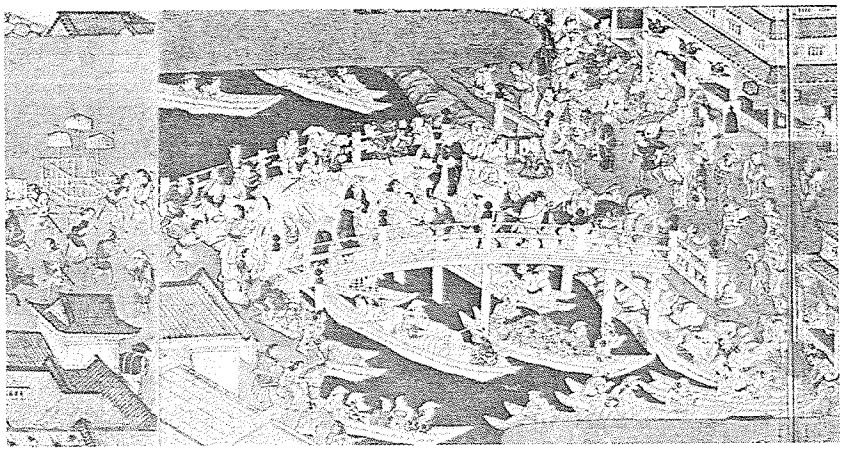
2. 日本橋橋詰広場の変遷

「橋詰広場」という用語が，近代以後に定着したとしても，その実体としての空間は，もっと古くからあった。たとえば精緻な描写で知られる「江戸名所図会」には，橋とともに橋詰広場のにぎわいの様子を描いた図が数多くふくまれている。そこでは，広場を分断する自動車交通がないために，橋畔全体が広場であった。橋詰広場は，眺望の場や憩の場というオープン・スペースの意味をこえ，さまざまな都市活動を支える場所であった。これを日本橋を例にとりながら，江戸から今日までの移り変りを眺めてみよう。

・江戸初期

五街道の里程起点である日本橋は，日本の中心であり，大江戸の中心であった。橋の上からは，江戸城や富士山が望め，江戸が日本の中心であることを実感できる場所でもあった。

江戸初期の様子は，寛永初期（1620～30年）に描かれたといわれる極彩色の「江戸図屏風」から推測



図表－1　江戸初期の日本橋の様子
（八曲一双の「江戸名所図屏風」の右隻と左隻の一部を貼り合わせたもの，「江戸図屏風」毎日新聞社，S. 47. 12 より転載）

できる（図表－1）。屏風の絵は南詰斜め下流の方向から俯瞰して描かれている。

馬上の武士・荷を積んだ馬・僧侶・老若男女のいき交う橋上の賑い。橋は擬宝珠で飾られている。橋の下に目を移すと，米俵や薪を積んだ舟が，日本橋川を何そうも行きかう。北詰東側にある魚河岸では，舟から魚をあげている。護岸は未整備で，土のままであるが，河岸には，米俵も積まれている。

橋詰広場の様子も興味深い。辻説法をしているのであろうか，敷物に坐している僧侶。橋上の北詰では，勧進中の僧侶。敷物に品物を並べて商いをしている光景。鼓に合わせて曲芸を披露する子供，むしろの上には小銭の祝儀がちらばっている。それを眺める親子連れ。子供は父親の肩の上だ。

南詰に目を移すと，高札場が目につく。それも後にみられる石積みの上に掲げられた高札場とちがい，地面に立てられた3本の高札を柵で囲った簡単なものだ。

新聞やテレビのなかった時代，高札場は幕府の広報センターであった。また高札場に集まった人々は，行きかう人々の話の中からも，ニュースや出来事を知ることができたに違いない。「人の集るところ，情報が行きかう」と広く解釈すれば，橋詰広場全体が情報の集積場所になるが，高札場はその核とみなせる。

向かい側の橋詰でも，僧侶がゴザの上で辻説法をしているようだ。

江戸の初期では，床見世などの施設はないが，橋詰広場のもつ多様な都市的機能は，未分化な状態ですでにあらわれていることがわかる。レヂャーとしての見世もの，情報センターとしての高札場，流通センターとしての魚河岸は，既に機能していたことがわかる。

橋上の僧侶，勧進中の僧侶など，図中に多くの僧侶の描かれていることが，他の時代の図絵にはみられぬ特徴である。

・江戸後期

図表－2は「江戸名所図会」（1836年）に描かれた日本橋である。北詰斜め下流の上空から俯瞰したものだ。

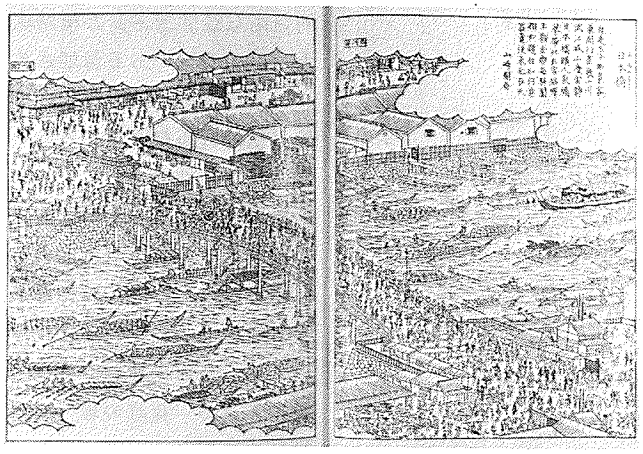
日本橋の橋上および橋下の川面のにぎわいが，うかがえる。江戸初期の図に比べると，にぎわいの様子，川幅など，大部違っている。河岸も整備されているが，ここでは橋詰広場に焦点をあててみよう。

橋詰広場は全体的に，整備されてきている。

床見世・露店・茶屋が軒をならべ，南詰には番屋と高札場が，北詰には火の見櫓，半鐘も描かれている。

大きな特徴は，町屋の建ち並ぶ通りの入口に，大木戸や番屋が見られ，治安・管理が行き届いてきたことだ。河岸は柵で囲われ，木戸が設けられたので，一般の人は自由に河岸へ出入りできない。

最初は簡単な作りであった高札場も，この頃には，文字通り，石垣で高く築かれた盛土の上に，屋根付



図表－2　江戸後期の日本橋の様子
（「江戸名所図会　上」人物往来社，S. 42. 5）

きの立派な高札場が作られている。

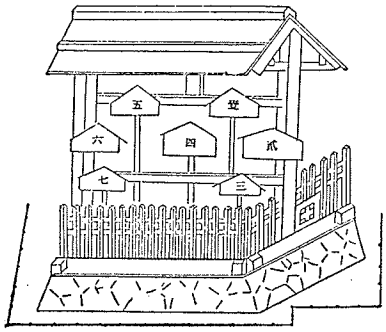
江戸で重要な高札場は，日本橋南詰・常盤橋内外・筋違橋門内・浅草橋門内・半蔵門外・芝札の辻の6ケ所で，掲げられた内容は，皆同じであった。中でも場所柄，特別重要なのが，この日本橋の高札場といえる。

この他高札場と言われたものが，約35ケ所あり，[6] 渡船場・橋際・湊口・吉原の大門などに設けられた。しかしこれらは先の6ケ所の高札場とは，大分性格が違っている。

享保のころ，日本橋には7本の高札が立てられた。内容は次のようなものだ。

① 庶民の心得を書いた「親子兄弟の高札」
② 薬およびにせ金作りを禁じた「毒薬の高札（書き出しが「毒薬」からはじまるため，こうよばれた）
③ 武器取締り・禁猟をうたった「鉄砲打の高札」
④ キリスト教の信仰を禁じた「切支丹の高札」
⑤ 荷物の重量と要する人足数・馬数を定めた「駄賃並び人足荷物の高札」
⑥ 日本橋から品川・千住・川口・板橋・上高井戸までの料金を定めた「駄賃並び人足賃銭の高札」
⑦ 火付人および火災時の諸規定を定めた「火付人の高札」

図表－3は，高札場の様子を示したもので，各高札の番号は，上記内容の番号と一致している。

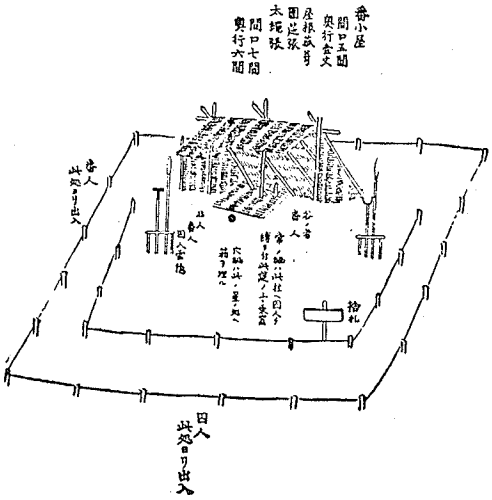


図表－3　日本橋高札場
（鷹見安二郎「東京史話」市政人社，S. 15. 6）

高札場のある反対側は，晒し場である。現在の交番の裏辺りになるのであろうか。ふだんは何の設備もない空地であるが，刑の行なわれる時に，図表－4のように縄張りをし，むしろ葺きの掘立小屋をつくった。見せしめにすることが，犯罪を防ぐひとつの手立てと考えられていた。[7]

江戸時代の郵便制度も，日本橋が利用された。江戸時代，郵便は，飛脚によって行なわれ，幕府用の継飛脚と，民間用の町飛脚とがあった。

初期の町飛脚は，日本橋の袂に叺（かます）を下げ，依頼者は書状に料金を結んで，その中に入れておく。飛脚屋は，それを集めて，目的地へ送った。が，目的地は限られていたようだ。飛脚屋の持ってきた書状や



図表－4　日本橋晒し場（「東京史話」）

荷物は，宿屋の前にむしろを敷いて並べ，人々はその中から自己の宛名のものを選んで受け取った。[8)]

日本橋橋詰広場は江戸の後期になると，施設も整備され，多様で複合的な機能をもった都市空間を形成するようになった。それは隣接した江戸橋広小路と連担して，大江戸の一大都市センターであった，といえよう。

それでも日本橋は，日本の中心地であることを実感できる場であると同時に，高札場や晒し場にみられるように，幕府にとっては，封建的な支配体制を誇示する象徴的な場として利用したに違いない。

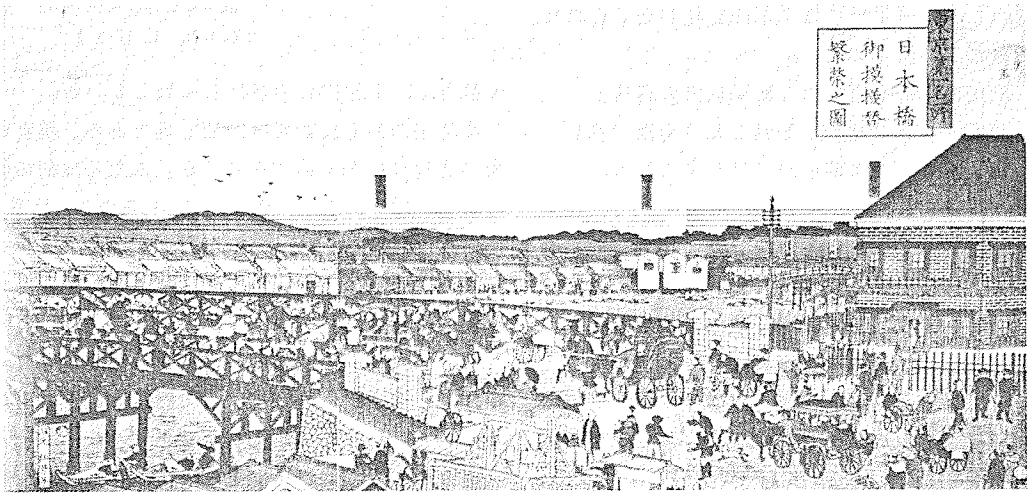
江戸の初期と後期との比較でいえば，初期の比較的自由な空間であった橋詰広場は，後期になると，大木戸や番屋のある管理された空間になった。

神奈川大学の網野善彦氏は，中世の橋のもつ無縁性（私的に所有することのできない，公的な性格のある無主の地であること）に注目している。このため旅芸人・盲人・乞食非人といった定住地をもたない放浪者は，橋を溜り場として集まってくる，と言われる。[9)] すると，江戸初期の橋詰広場には，中世以来の橋のもつ無縁性ゆえに，自由空間が形成されていたが，幕府の体制が整うとともに，無縁の地は，権力による“有縁の地”へと転化された，と言えないだろうか。

・文明開化期

日本橋は明治６年（1873年）５月，洋式木橋に改築された（図表－５）。擬宝珠付の和式橋梁にかわり，橋面がフラットなトラス高欄の橋になった。橋材には上等な槻（つき）（けやきの一種）材を使ったが，ハイカラを狙ったのだろう。ペンキで青く塗った。親柱・袖柱には，石材が用いられている。

注目すべきは，歩車道分離の高欄である。中央車道は，人力車と馬車が走り，両側の歩道は，左側通行で，南から北へ（銀座から日本橋へ）行く人は，上流側（図では手前側）の歩道を，逆方向は，下流側（図では向こう側）の歩道を歩くようになってい



図表－５　明治初期の日本橋
（端山孝「浮世絵でみる幕末・明治文明開化（改訂新版）」講談社，S.55.7）

た，という。[10)]

しかし錦絵をみる限り，それぞれ行きかう人がおり，厳密には守られていなかったようだ。

橋台への橋面の取りつけは，車両交通の便を考え，江戸名所図会（図表－2）にみられた階段に代わり，石を用いて平滑な平面仕上げにしている。

橋詰広場には，まだ高札が残されている。しかし文言は慶応4年（1868年）3月，新政府により，書き改められた。この時掲げられた高札は，全部で5枚あり，うち3枚は，永久的に掲示されるもので「定三札」とよばれ，残り2枚は「覚札」と称して，一時的の布令を掲示したものであった。

「定三札」の内容は，庶民の心得，強訴禁止，およびキリスト信教の禁止の3種類があった。中でも“庶民の心得”を説いた高札は，時代の変化がみられて興味深い。主旨は江戸時代のものと同じであるが，内容が違っている。江戸のとき，

＜親子兄弟夫婦を始め，諸親類にしたしく下人等に至る迄，これをあはれむべし。主人ある輩は，おのおのその奉公に精を出すべき事＞

とあったのが，明治には次のように変っている。

＜人たるもの，五倫の道を正しくすべき事＞[12)]

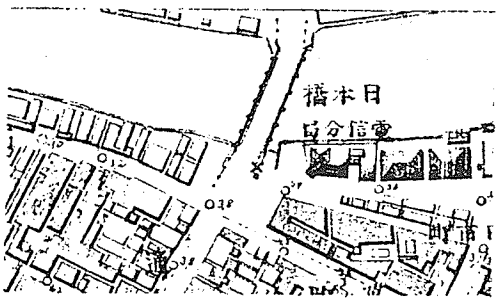
五倫とは儒教の中にある人の守るべき5つの道：君臣の義・父子の親・夫婦の別・長幼の序・朋友の信をいう。

この他に“覚札”と称して一時的な布令が二枚出された。

橋詰広場にはさらに，客待ちの人力車が見える。現代の「タクシー乗場」の機能も橋詰が果している。

晒場のあった南詰東側には，明治5年（1872年）5月に開業した日本橋電信局が見える。両国・浅草橋の電信局も，これと同時に開業した。「情報センター」としての橋詰広場の機能は，より一層高度化された。

図表－6は，参謀本部陸軍部測量局の作成した明治17年（1884年）の地図である。南詰東側には，交番を示す×印がある。橋詰広場の治安・監視機能は，江戸から引き継がれていることがわかる。

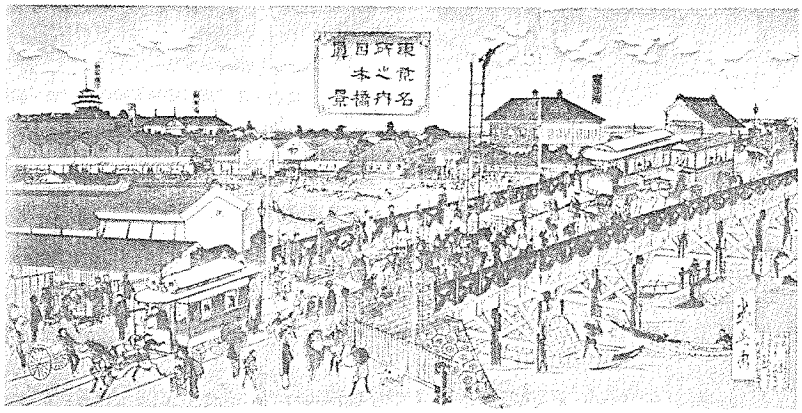


図表－6　日本橋界隈の図（M17）
（参謀本部陸軍部測量局作成）

すると，図表－5の右端に描かれている制服を着た2人は，警察官なのであろうか。

ここで「江戸名所図会」に描かれた橋詰広場の様子とくらべると，大きな違いのあることに気づく。橋詰が何となく，さびしい。閑散としている。それは，橋詰広場のにぎわいを支えていた床店のなくなったことだ。土地利用の大きな変化であると同時に，これは維新政府の施策でもあった。

明治6年（1873年）2月，明治政府は，「葭簀張床店取除けの布令」を出した。これによって橋詰広



図表－7　明治半ば頃の日本橋
（「浮世絵でみる幕末，明治文明開化（改訂新版）」）

場や江戸橋・両国橋広小路のもっていた娯楽センター的な機能が失われ，人の賑いも失われていくのである。

もう一枚，日本橋の錦絵をみてみよう。図表－7は，明治半ば頃の日本橋の正月風景を描いている。北詰上流側から俯瞰した図柄になっている。

橋上では火消しの梯子乗り，明治15年（1882年）に開通した鉄道馬車には日の丸の旗が飾られている。獅子舞のグループも橋詰に見える。

親柱の上には，ガス灯がみられる。[13] 歩車道分離の高欄（図表－5）は鉄道馬車の開通とともに撤去され，高欄がわりに突起物が設置された。図の中央下には，（図では色はでてないが）黒い郵便ポストが描かれている。[14] 中央には，日本橋電信局，左手には，江戸橋橋詰広場前に建てられた東京郵便局，その遠方には，第一国立銀行の楼閣を望見できる。

江戸時代には見られなかった新しい都市景観が出現していた。

・モダニズム期

明治44年（1911年）4月，今日ある石造りの二連のアーチ橋が完成した。大正から昭和初期にかけて橋詰には近代建築が建ち並び，西欧的な橋詰広場が形成された（写真－1）。

写真－1　モダニズム期の日本橋，銀座方面を望む
（「街・明治，大正，昭和 － 関東編」
都市研究会，S. 55. 11）

南詰東側には，日本橋電信局にかわって野村ビル（安井武雄設計，昭和4年7月完成，以下同），村井ビル（吉武長一，大正2年），西側には，国分商店（大正4年4月）

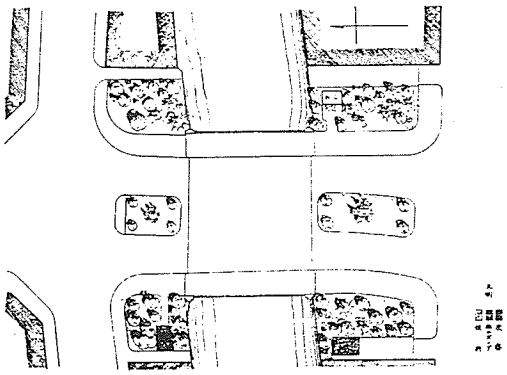
北詰西側には，帝国製麻ビル（辰野金吾，大正3年，現大栄不動産）。東側には，魚河岸にかわって，新しいビルが建ち並んだ。

川に面した野村ビルや帝国製麻ビルは，今でも当時の設計思想がうかがえる。舟から荷の積み降ろしをするため，クレーンなどを設置した痕跡がある。現代の建物は川に背を向けて建てられているが，これらの建物は，川面からの見映えも考慮して設計され，水辺と調和するようデザインされている。

塔のある帝国製麻ビルは，塔屋が回り階段になっている。階段を降りながら，窓枠に縁取られた水辺と日本橋の織りなす景観の変化は，かっての豊かな都市空間をほうふつとさせる。外観的にも，また内部空間と外部空間とを見事に融和させた名建築の一つと言える。

ここで震災後の橋詰広場を代表する復興橋梁の橋詰広場の配置計画について付言しておこう。

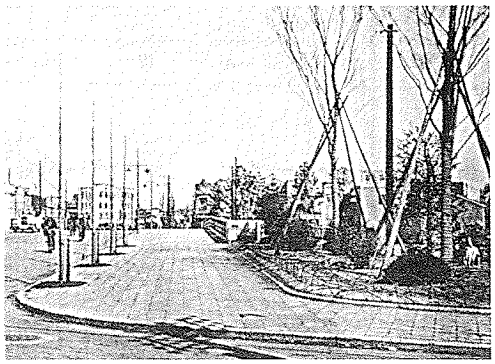
「帝都復興事業誌」には，橋詰広場の典型例として，金杉橋，地蔵橋，報恩寺橋，江戸橋，永代橋の5ケ所の平面配置図を掲載している，[15] 図表－8は，江戸橋の平面配置図を示す。橋詰広場の三大施設：交番（北詰上流側），トイレ（南詰下流側），撒水ポンプの機具納庫（同上流側）が，各橋詰広場に分散して配置されている。



図表－8　震災復興当時の江戸橋平面配置図
（「帝都復興事業誌土木扁上巻」
復興事務局，S. 6. 3）

残りの敷地には植栽がほどこされ，芝生が植えられた。しかも各橋詰広場の境界には，波垣金物で柵がめぐらされ，人の出入りは禁止された（写真－2）。

震災復興事業で設置された橋詰広場は，名称のもつイメージとは違って，橋や川面をながめたり，ベンチに腰かけて小休止するという憩のスペースではなかったのである。[16]



写真－2　茅場橋橋詰広場の植栽状況，波垣金物に注意
（「帝都復興記念帖」復興局，S. 5. 3）

橋詰広場の設置理由は前にのべたが，では橋詰広場の植栽は，いかなる目的でなされたのか。それは橋を美しく飾る演出効果をねらって植えられたのである。橋詰広場の植栽は，橋の正面景を飾るとともに，川面からながめた時，親柱と一体になって橋の両端を飾ると考えられた。

今日でもその効果は，十分うかがえる。とくに，岸辺から枝ぶりよく突き出ている樹木を，川からながめるとき，それは，都会の喧騒（けんそう）を忘れさせてくれるオアシスとなる。

・現　代

高架道路が橋上を覆い，日本橋名物のキリンのついた電飾灯も，高架道路の下に隠れてしまった。

東京都が都政モニターに対して行ったアンケート調査「日本橋の景観に対する評価」は，回答の多い順に並べると以下のような結果であった。[17]

「好ましくはないが，やむを得ないと思う」
47.1パーセント

「あのような景観にすべきではなかった」
38.5パーセント

「調和していると思う」　4.2パーセント

「何とも感じない」　2.7パーセント

「知らないので答えられない」　7.5パーセント

「好ましくはない」をふくめると，悪い評価の人は85.6パーセントにもなり，ほとんどの人が高架道路の存在を“よくない”と考えている。

それにしても「やむを得ない」と是認している人が，2人のうち1人いる。現代の産物として是認すべきなのであろうか。それにしてものわかりのよすぎる人が多い。

南詰東側には，交番・小公園・国旗掲揚ポール・野村ビル。西側には，日本橋の由来碑・ベンチ・植栽。

北詰西側には，移設された道路元標ポール・新しい道路元標のコピー・植込みなどがみられる。東側には，魚河岸の碑・国旗掲揚ポール・地下式トイレ。

北詰西側の河岸は，路面より一段低くして，水辺へのアプローチがとられていた。しかし，それも嵩あげされ，今日では水辺への接近は困難である。

南詰東側の河岸はまだ，一段低くなっているが，これも近いうちに嵩あげされる，という。

このように嵩あげされると，水辺への接近は困難になる。4年前日本橋の写真展が開かれた。写真家の新井英範（ひでのり）氏が，四季の移り変りをゴムボートにのって1年間に渡って撮影したものだ。日本橋の新しい魅力を引き出した写真展として好評であった。[18]彼は，唯一残されたこの一段低くたった河岸を使ってゴムボートへ乗り移っていた。嵩あげされると，これもできなくなる。

日本のそして大江戸の中心地であり，シンボルであった日本橋も，今は見る影もなく変ってしまった。かってのにぎわいを日本橋にとり戻すことは無理としても，江戸橋をふくめ日本橋界隈をまず魅力ある空間にすることは，東京（または日本）のアメニティを復活させる原点と言える。

高架道路の寿命は，5～60年と聞いている。昭和39年の東京オリンピックに間に合うよう作られた高架道路は，まだ20年に満たない。さすれば，耐用年限がきたら高架道路はやめ，トンネル方式や別のルートを考えるなど，今から常磐橋から江戸橋一帯をふくむ日本橋川の再生計画を官民共に検討しておくことは，いかがなものであろうか。

3.　橋詰広場施設の移り変り

図表－9は，日本橋だけでなく，他の橋も考慮しながら，橋詰広場施設の変遷を，時代別にまとめたものだ。[19]目的や機能は変らぬもの（ただし，形は変っている），失われたもの，などがわかる。

図表－9　橋詰広場施設の時代別一覧

目的・機能	時代区分	江戸初期	江戸後期	文明開化期	モダニズム期	現代
橋梁本体	a．橋梁保全 b．維持管理 c．架替・補修 d．修景			袂木	装飾的な親柱 植栽	高欄の端末処理
橋梁関連	e．防災		火の見やぐら 広小路	・床見世などの除去で空地はふえる	撒水ポンプ施設	防災資材格納庫
	f．交通	・ターミナル機能 （荷揚場 渡しの舟付き場）	・ターミナル機能 （荷揚場 渡しの舟付き場） 橋台と橋面との接続……階段	・人力車待機所 橋台と橋面との接続……平面	・段差のある歩車道区別 ・隅切	・高速道路の出入口 ・高架道路の上空通過 ・人と車の立体分離
	g．治安・監視		・番屋 ・木戸	・交番	・交番	・交番
	h．オープン・スペース				・近代的な橋詰広場 ・観賞公園，トイレ	・橋詰と橋上公園との一本化 ・児童遊園 ・植栽場所，トイレ
	i．情報	・情報センター （高札場）	・情報センター （高札場，迷子石）	・電信局 ・郵便局，ポスト	・電話ボックス ・碑	・碑
	j．その他	・流通センター （魚市場） ・レジャー・センター （大道芸，露店） ・勧進僧侶	・流通センター （魚市場，四日市） ・レジャー・センター （見せ物，床見世 露店，茶屋）	・流通センター	・祭礼の演出 （国旗掲揚ポール）	

大きな特徴をあげてみると，次のようになる。

① 橋詰広場のにぎわいを保証していた江戸時代の交通・流通・娯楽・情報などの多重的で複合的な都市センター機能は，今日，ほとんど失われてしまった。いいかえれば，橋詰広場の都市センター機能が一つひとつ分離されたのが，近代以降の橋詰広場の歴史といえる。しかしながら，その残滓は現代でも感じとることができる。

また，都市的な視点でながめれば，江戸から東京へと都市規模の巨大化にともない，橋詰広場の施設やスペースだけでは対応しきれなくなり，都市センター機能の分離と再編成が行なわれた，といえる。

② 防災・交通・治安・監視といった江戸から続く橋詰広場の機能は，その内容や形態は変ったが，現代へと引きつがれている。しかも掘割や河川が埋め立てられても，かって橋詰広場のあったところに，今でも消防施設や交番が残っていることがある。これらの施設は，橋があり，橋詰広場のあったことを物語る“歴史の記憶の証し”なのだ。

トイレについても，同じことが言える。

③ 憩いの場としての小公園の機能が，大正初め頃注目され，震災復興計画では，橋詰広場を結節点とした“緑水ネットワーク”が形成された。

今日この“緑水ネットワーク”は堀や中小河川が埋め立てられたため，一方のネットワークである水路の方が，分断された。同時に“緑の結節点”である橋詰広場も失なわれた。

辛じて残された水路と街路樹とで，今日どのようなネットワークが形成されているのだろうか？ネットワークの体をなしていないかも知れない。これは，今後の調査課題といえる。

④ 今日橋詰広場は，交通とオープン・スペース機能に重点がおかれて利用されている。

交通施設の種類は，ひじょうに多様である。高速道路の出入ランプ（たとえば江戸橋）・バス停留所・横断地下道・横断歩道橋・駐車場・交通標識・道路案内標識・信号機柱などがあげられる。

しかし江戸時代に担っていた交通のターミナル機能は，完全に喪失した。

⑤　江戸から大正期までの橋詰広場の管理形態の変遷をみるとまず，江戸初期の自由な空間から，木戸が設けられ，橋番がいるというように，江戸後期にみる管理された空間へと，橋詰広場は変ってきた。

明治初期には大道芸，床店なども禁止された。

大正期には，植栽がなされ，見た目にはきれいになったが，この橋詰広場は，眺める対象としての観賞公園であった。橋詰広場の回りは，人が中に入れないように波垣金物で囲まれていた。

自由な空間から，制限された管理空間へと移行してきたのが，江戸初期から大正期に至る大きな流れといえる。

⑥　今日，橋詰広場の中には，通り抜けのできる植栽地になったり，子供達が遊べる児童公園や児童遊園に利用されているものがある。管理された空間には違いないが，人々が出入りできるという点だけをみれば，震災復興期よりも前進したといえるだろう。

しかし橋詰広場は，水際にあるということを忘れた配置計画や空間処理が多い。そこでは橋詰広場を児童公園にした意義は認められない。児童公園に適した空いた用地が，たまたまあったから，そうしたにすぎなくなる。

以上のような問題点を，1つひとつ克服しながら新しい橋詰広場のあり方を検討し，魅力ある"橋空間"を創造することが，今後の大きな課題といえよう。それには，橋詰広場という限定された場所の問題として把えるのではなく，都市的な脈絡の中で橋詰広場を把えなおす必要がある。

謝　辞

本研究の遂行に際しては，鹿島財団の研究助成「橋および橋詰広場の景観・空間形成に関する研究」（昭和59年より継続）および(財)日本文化会議の委託研究費の一部を使用させて頂いた。また「東京の橋研究会」では会員諸氏から，貴重な意見や助言を頂いた。末尾ながら紙面をかりて，お礼を申し上げます。

〔注〕

(1) Oxford English Dictionary（オックスフォード英語大辞典）の略。"歴史的原理"にもとづいて編纂された辞典。1150年以後の英語の文献にあらわれるすべての普通語を収録し，その各語について，可能なかぎり過去にさかのぼって語形・語義・用例を示している。永嶋大典「OEDを読む」（大修館，45　198～199ページ　1983年5月）より。

(2)「日本国語大辞典」小学館　S. 50

(3) 十返舎一九「東海道中膝栗毛」享和2（1802）年～文政5（1822）年の作。
ここでは「日本古典文学大系　62」（岩波書店，436ページ，昭和33年5月）を参照した。

(4) 詳しくは，次の文献を参照。伊東孝・岡田孝<震災復興橋梁の計画とデザイン的特徴>「第4回日本土木史研究発表会論文集」土木学会，S. 59. 6。なおこの論文では，橋詰広場を結節点にした下町の"緑水ネットワーク"についてもふれている。

(5)「道路樹木植付ニ関スル内規」には"橋台広場"という用語も使用されている。"橋詰広場"と"橋台広場"とを区別してたのだろうか。

(6)「東京市史外篇　日本橋」東京市役所，120ページ，昭和7年7月。序文には，筆者鷹見安二郎とある。
一般的な性格の高札場の数が，数十箇処あったという文献もみられる。たとえば，「東京史話」市政人社，51ページ，昭和15年6月。ただし筆者は同じであるか。

(7) ヴェネツィアにあるサン・マルコの小広場でも，公衆の面前で絞首刑が行なわれていたという。（陣内秀信「東京の空間人類学」筑摩書房，117～18ページ，1985年4月。他にも参考になる点が多い）

(8)「東京市史外篇　日本橋」，107ページ。

(9) 網野善彦「無縁・公界・楽」平凡社，164～176ページ，1978年6月。

(10)「東京市史外篇　日本橋」，55ページ。

(11)　同　122～23ページ。

(12)　同　145ページ。

(13) ガス灯は，明治8年に設置された。（「東京市史外篇　日本橋」55ページ）

(14) 郵便ポストははじめ白木の箱が用いられたが，明治5年2月東京府下150カ所に，緑色に塗られた縦長の箱が配置された。明治10年代の終りから黒塗りになり，明治41年10月朱塗りとなり，現在に至る。（端山孝「浮世絵で見る幕末・明治文明開化（改訂新版）」講談社，112ページ，1980年7月）

(15)「帝都復興事業誌　土木篇上巻」復興事務局，92～94ページ，昭和6年3月。

(16) 永代橋の左岸下流側の平面配置図では，橋詰広場に通路があり，中にはベンチらしきものがあるが，これは例外的である。また日本橋川にかかる湊橋のように，コンクリートの袖高欄に直接ベンチを組み込んだ例もみられる。設計手法として参考になる。

(17)「昭和57年度都政モニターアンケート『東京のまちなみ』集計結果報告書」東京都生活文化局，15ページ，昭和57年9月。

(18) 写真展終了後，新井英範氏は，貴重な写真一式を土木学会図書館へ寄贈した。

(19) この他，橋詰広場の橋梁本体に対する役割として，橋梁保全，維持管理，架替・補修，修景などがあげられる。なお「橋梁保全」とは，橋梁の基礎構造に影響を与えるような近接構造物の建設を防止することである。